
透析患者へ視覚に訴えた服薬指導を試みて

高橋佳代子、森川ユキ子、高橋園子、細谷サツキ、
小原 崇、佐々木隆聖
仙北組合総合病院 人工透析室

The trial of visual medication instruction to dialysis Patients

Kayoko Takahasi, Yukiko Morikaha, Sonoko Takahasi, Satuki Hosoya,
Takasi Obara, Ryusei Sasaki
Senboku General Hospital

<はじめに>

高齢で透析導入となる患者の割合が急速に増加してきている。繰り返しの指導でも服薬方法の間違いや、自己調節による薬の過不足がみられ適切な服薬をしていない患者が多い。これまでの服薬指導は、医師や看護師により患者及び家族に口頭で説明を行っていた。村本らは¹⁾「一般に人は耳から聞いたことの半分は5分以内に忘れてしまう」と述べており、口頭の指導では内容を十分に理解されていないため、ポスター掲示や写真付き服薬説明書を用いた、指導を試み効果が得られたので報告する。

<目的>

透析患者及び家族に、視覚に訴えた指導を行うことで、定期薬に対する理解を深めることができる。

<研究方法>

期間・平成13年6月～同年12月

場所・仙北組合総合病院人工透析室

対象・透析患者69名（男36／女33）

方法・調査研究

1. 薬の服薬状況、理解について指導前に聞き取り調査をする。
2. 写真付き服薬説明書を作成し個別に配布する。（図1）服薬方法や作用についてポスターを待合室に1ヶ月間掲示する。（図2，3）指導後に聞き取り調査をする。

指導に用いた説明書

★ 様のお薬の説明書です★

他の病院、診療所にかかるとき、または薬局でお薬をお求めになるときはこの用紙を見せて下さい。

ID No. 0 作成日 2002年10月12日 診療科 0 歳 10 か月 男性

受付番号

1. 炭カルシウム(旭化成) (白)			
朝	昼	夕	寝前
			☑

薬の作用
透析患者のリンを吸着するの用に用います。

注意事項

記号 251/CAT:2

2. カリメート(微費白) (淡黄)			
朝	昼	夕	寝前
			☑

薬の作用
透析管内のカリウムを吸着して糞便中に排泄することにより、カリウムを体外へ出し、血液中のカリウムの上昇を抑えます。

注意事項
●水によく溶けておのみ下さい。制酸剤との併用で効果が弱くなる場合があります。大便が、激しい腹痛などの症状が現れた場合はご連絡下さい。

記号 008

図 1

服薬説明に用いたポスター

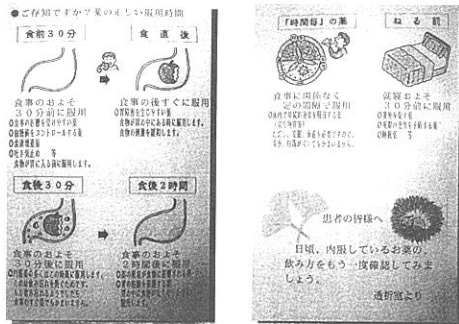


図 2



図 3

3. 調査の内容を、薬の理解度について4段階に区分する。

理解度別分類

- A群：薬品名と薬効と用法に理解あり
- B群：薬品名に理解なし 薬効と用法に理解あり
- C群：薬品名と薬効に理解なし 用法に理解あり
- D群：全くわからない

解析：Mann-WhitneyのU検定 (p<0.05)

定期薬の実際

二週間に一度、定期薬が処方され患者の服薬状況に合わせて分包し、変更時には必ず口頭で説明を加えて渡していた。

<結果>

指導前後の理解の分類では(図4)、A群は服薬数が少なく薬に理解がある人たちでした。B群は透析歴が短く、服薬忘れが多くみられました。C群は年齢も高く内容を理解されないまま服薬していました。D群は合併症があり、服薬数が多く、何の薬かわからないまま服薬していました。薬の理解の推移では(図5)指導前後でA群は21名から42名と増加しました。B群は17名から14

名に減少しました。C群は19名から10名に減少しました。もっとも悪いD群は12名から3名に減少しました。指導前後で有意差が認められ薬への理解が深まりました。

服薬忘れの患者数は（図6）指導前39%から指導後31%に減少し、有意差が認められませんでした。

理解度別患者背景

群	年齢 (平均・歳)	内服数 (平均・数)	透析歴 (平均・年)
A	51	5.8	9.5
B	58	6.3	5.4
C	68	6.6	7.2
D	65	7.2	5.5

図4

服薬理解の推移

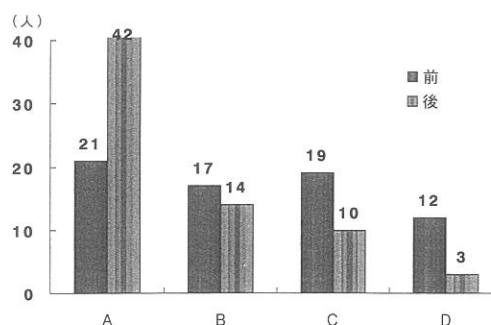


図5

服薬忘れの患者数

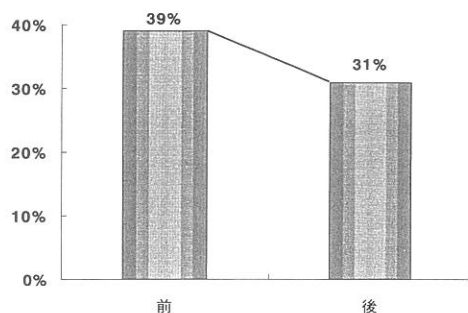


図6

<考 察>

写真付き服薬説明書は、自分に処方されていた薬を比較でき、薬効と用法用量を知ることができたと考える。

A群は、理解力もあり知識を再認識するのに有効であった。B群は、薬の必要性を理解することで服薬忘れの改善につながった。C群は、年齢も高いため繰り返しの指導を行うことで、薬品名で請求するようになり理解力が深まったと考える。D群は、物忘れや視力低下があり、家族管理の多い群で、写真付き説明書を配布し、家族から内容を理解してもらうことにより確実な服薬につながったと考えられます。

視覚に訴えた指導は、服薬を正しく理解することに有用であるが、服薬忘れの改善にはつながらなかった。

今後、服薬説明書を用いた指導を継続しながら、個々のレベルに合わせていくことが必要である。また、ポスター掲示は見やすくするため、絵や図を入れた工夫や、ベットサイドでも行える指導が必要であると考えます。

<結 論>

1. 理解力良好な A 群は30%から61%と増加した。
2. 服薬忘れ患者数は39%から31%と減少したが有意差はなかった。
3. 「視覚に訴えた服薬指導」は服薬コンプライアンスを改善する可能性がある。

引用、参考文献

- 1) 村本淳子、竹本三重子、菊池悦子、透析を受ける人の看護Q&A、廣川書店P146～P160、2000
- 2) 藤原千鶴子、臨床透析Vo116、NO10、P57～P63f、2000
- 3) 大野晃子、透析ケアVo17、NO10、P34～P40、2001
- 4) 寺本博歌、薬剤アンケートを用いた服薬指導の効果について、日本透析医学雑誌、NO44、P876、1999